



お別れ

南京大虐殺の生存者易蘭英さんと陶承義さんが逝去

南京大虐殺の生存者易蘭英さんと陶承義さんが、2月15日に逝去されました。

1926年5月4日に生まれた易さんは、1937年の日本軍による南京侵攻後、家族とともに五台山付近の五条巷難民区に避難した。「生計を立てるため、私は五条巷の仮住宅の前に露天商売を家族から頼まれて、タバコやマッチ、ピーナッツを売っていた。ある朝、銃を携えた日本兵の小隊が現れ、馬に乗った将校が私に近づいたが、何を言っているのか分からず、私はその場でボツとしていた。すると将校が私を複数回にわたり平手打ちを加え、私の一本の歯を打ち落とされ、口元に血が流して、耳鳴りがして一時的に聞こえなくなった。その後、将校がタバコを取り出して私に見せ、私がすぐマッチを渡したから更なる暴力を免れた」と彼女が生前に証言した。この体験は幼い易さんの心身ともに極度の恐怖を与え、生涯にわたり彼女はずっと動悸と耳鳴りに苦しめられた。



△2022年に記念館スタッフが
易蘭英さんの誕生日を祝った

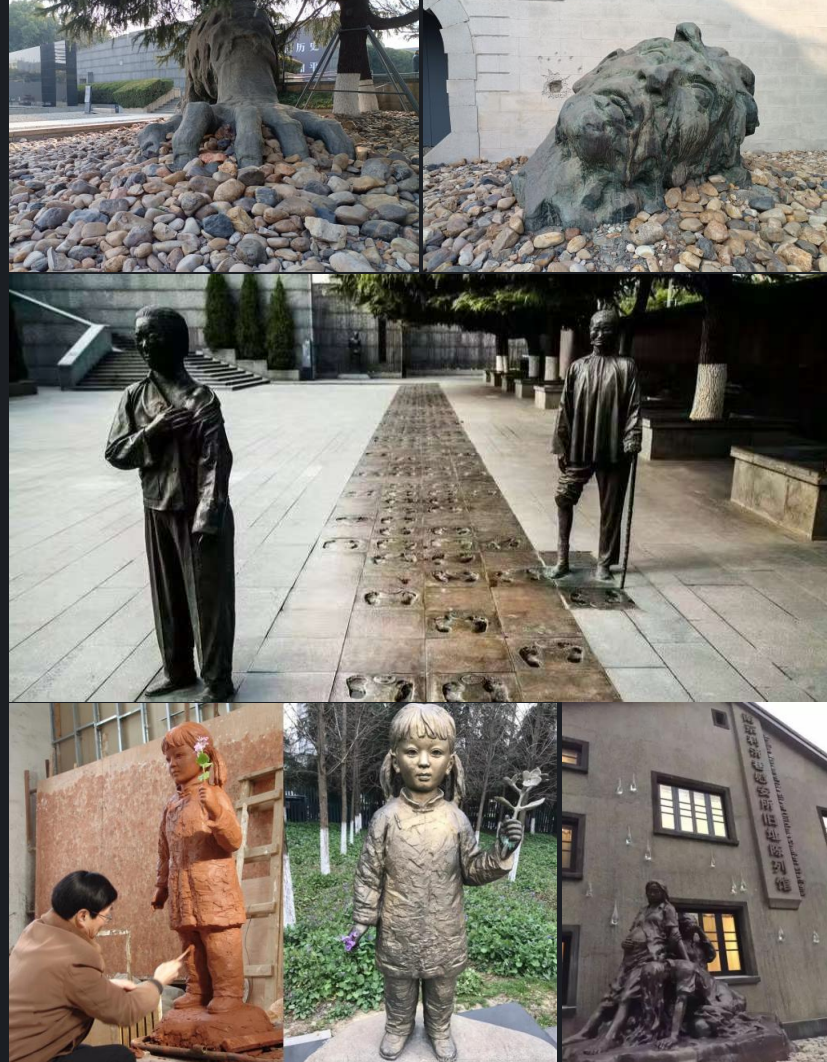
陶さんは1936年5月24日に生まれた。1937年、日本軍が南京を占領した後、彼の父・陶仕棟さん、そして七番目の伯父・江金栄さん、六番目の従兄・江家志さんとともに日本軍に連行され、漢中門の外側で虐殺された。一家の経済的基盤を失った陶家は、母親が子供たちを連れて行商で生計を立てざるを得なかった。



△陶承義さん

彫刻家の呉顕林さんが死去

2月21日、彫刻家の呉顕林さんが82歳で亡くなった。彼は記念館の「古城の災難」大型組み合わせ彫刻、「歴史の証人の足跡」銅板路、生存者「倪翠萍」「彭玉珍」銅像、「紫金草少女」銅像、さらに記念館の分館である南京利濟巷慰安所陳列館「慰安婦」テーマ銅像の創作者である。呉さんは生前「彫刻は歴史の記録者であると同時に、未来への警鐘でもある」と語った。



心の声

国際ボランティアが南京の思い出を語る

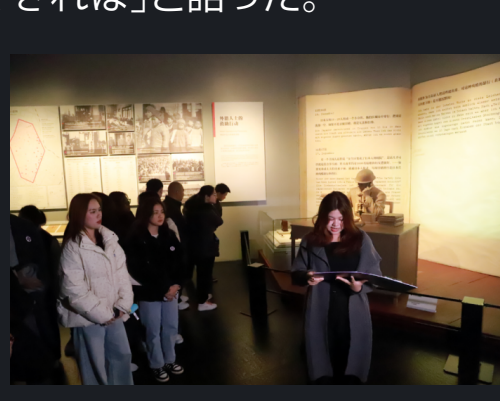
3月5日、国際ボランティアたちが記念館に集まり、1937年に南京の難民を救助したロバート・ウィルソン医師の日記と、南京安全区国際委員会委員長のジョン・ラーベさんの日記を見学者の前で読み上げ、そして彼らが平和へのメッセージを書き残した。

スペイン出身の国際ボランティア・フェルナンドさんはウィルソン医師の日記の一節を朗読した。彼は「生命と尊厳を守る唯一の道は、歴史を学び、その教訓を尊重して戦争の繰り返しを防ぐことだ」と感想を記した。



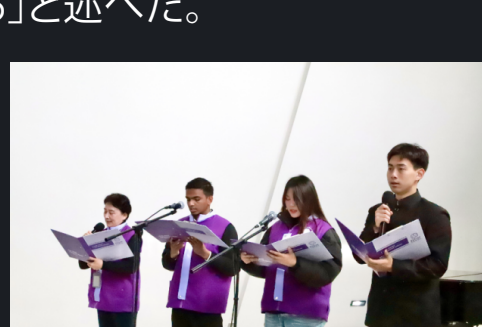
△フェルナンドさん(左)

『ラーベの日記』の抜粋を読んだのは、タイ出身の19歳の国際ボランティア・劉宝玉さんである。劉さんは中国に来る前から南京大虐殺のことを知っていた。彼女は「国際ボランティアとしての私の朗読を通じて世界の人々が平和の尊さを知り、戦争の残酷さを直視するきっかけを作りたい、私の行動によって異文化の間に架け橋を築くことができれば」と語った。



△劉宝玉さん

バングラデシュ出身の国際ボランティア・趙曼衍さんは、詩「紫金草」を朗読した。趙さんは「第二次世界大戦中、戦争の炎はかつて私の故郷も戦禍に巻き込まれた。だからこそ中国人民の苦しみを深く共感できる」と述べた。



△趙曼衍さん(左から2人目)

マレーシア出身の22歳の国際ボランティア・方依静さんは、幼少期より両親から南京大虐殺の史実を伝えられて育った。方さんは「歴史の真実をこの目で確かめるため、ずっと南京に来たいと思い続けていた。この思いが私をここに導き、朗読を通じて歴史への敬意を表し、犠牲者への追悼を表したい」と語った。



△方依静さん